

ネットワークアンケート ③7

糖尿病ネットワークを通して

医療スタッフに聞きました

Q. 通院されている患者さんで、 "相性"が合わないと感じる方はおられますか？

糖尿病患者さんとは“長いお付き合い”になることが多いもの。患者さんと主治医・医療スタッフの人間関係の良し悪しは、治療に対するお互いのモチベーションにもつながってくると考えられます。今回は、“相性”という側面から、お互いの思いを伺ってみました。

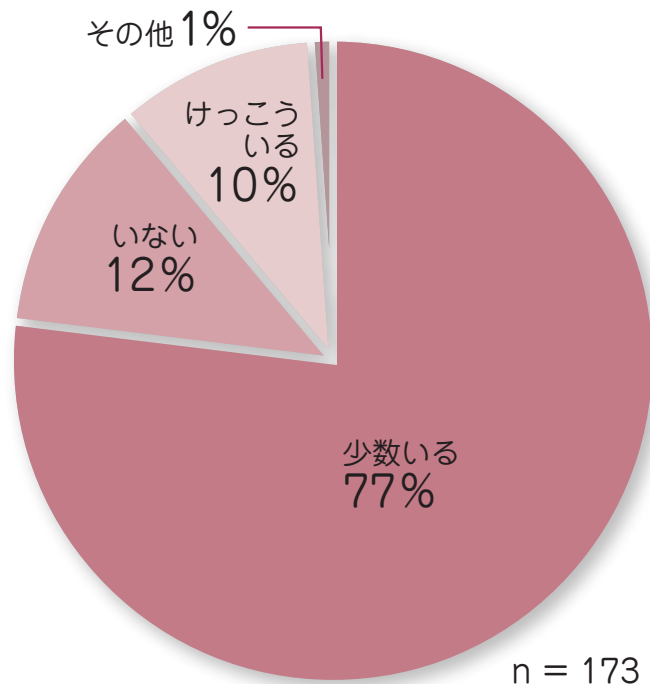
[回答数：医療スタッフ173名（医師28、看護師53、管理栄養士45、薬剤師29、臨床検査技師10、その他8など。うち日本糖尿病療養指導士54）、患者さんやその家族502名（病態/1型糖尿病198、2型糖尿病286、糖尿病境界型7、その他11、治療内容/食事療法322、運動療法277、経口薬246、注射薬39、インスリン療法309/重複回答有）]

“相性が合わない”と感じている医療スタッフは、「少数」「けっこういる」を含め87%に上りました。医療スタッフも人間ですから、多くの患者さんと接するなかで、そう感じることもあるのは特別なことではないかもしれません。その際は、「我慢して付き合い」、「患者さんと話し合う」といった対応で臨んでいる方が大半のようです。一方で、相性が悪くて患者さんが転院の道を選ぶことが「ある」と答えたのは約3割、転院までいくことは「あまりない」と答えた方は約4割と、相性が転院の理由になる可能性があることがわかりました。

さらに、コミュニケーションの良し悪しが患者さんの治療経過と関係するかどうかの問いに、81%が「あると思う」との回答。長く治療を続けていくうえで、良好な関係づくりがお互いのモチベーションに影響を与えると実感しているようで、良好な関係づくりのためには、71%の医療スタッフが「患者さんと積極的に会話している」とのことでした。なお、患者さんの顔と名前を覚えているか？の問いには、「通院歴の長い人、印象の強い人のみ」が最

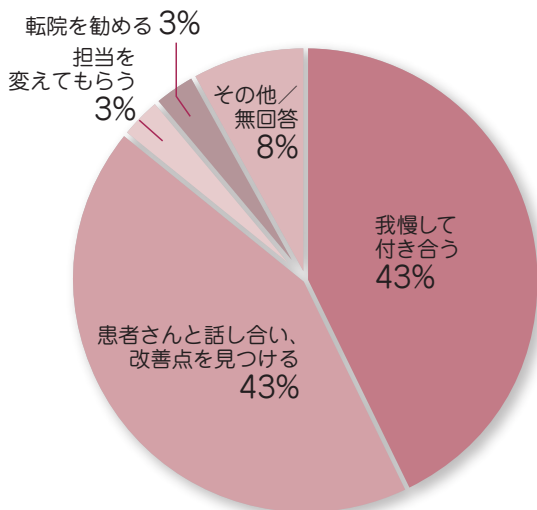
も高く55%、「ほぼ全員を覚えている」人は28%となっています。

自由記述では、「高齢化で軽度の認知症を併発するなど、理解力、記憶力の乏しい患者さんが急増している」、「生理的な相性もあるが、ある程度時間と回数を重ね、こちらが患者さんの考え方を理解する努力も必要」、「雑談できるような時間が欲しい」、「検査の結果を聞くと、「聞いてどうする、聞かなくて、お前が治してくれるわけじゃな



いだろ」と怒鳴る患者さんも・・・、「不満がありそうなのに、素直に話してくれない時は苦勞する」、「相性よりも自分の病気を治そうという意欲があるかないかで大きく違うと思う」等々、現場では十人十色の対応策が求められていることがうかがえました。

Q. 相性が悪い患者さんに対して、 どのように対応されますか？ (n=173)



Q. 患者さんとのコミュニケーションの 良し悪しと治療経過の相関 (n=173)

